

子ども理解の視点を広げていくために

―タビストッククリニク（ロンドン）のコース―

清原 規子

一九八七年から始まった、日本の乳幼児精神保健の会「フォーウインズ」（世話人代表 澤田敬）が、一九九八年長崎でありました。その時の講演に、タビストッククリニクからジュリエット・ホプキンスが来られ、乳幼児にとって、保育者に精神的にも肉体的にも守られた環境の大切さを、ボルビーとウイニコットの説をもとに話され、そして、タビストッククリニク

クの、赤ちゃん観察のコースの話をされました。幼稚園で働いていた私は、彼女の話に魅せられて、二〇〇一年夏、ここ、ロンドンにやってきました。

タビストッククリニクのこと

もともと一九二〇年、主に戦争による精神的な病を抱えた人への治療から始ったタビストッククリニク

では、現在は、乳幼児から成人までの精神保健の治療と専門家の育成に力を入れています。スタッフは家族心理療法家、子どもの心理療法家、心理学者、精神分析家、精神分析医、ソーシャルワーカー、看護婦などさまざまです。専門家育成のコースは、子ども、思春期、成人やカップル、またさまざまな障害、抱えている問題に応じ、七〇以上ものコースに分かれ、そしてほとんどのコースに、学生は皆、働きながら通っています。

私の通っているコースのこと

私が現在通っているコースは、精神分析的赤ちゃん観察コースといえます。最初は、精神分析ということばに、自分の中になにか粋ができてしまうのではないかとちよつととまどいを感じたのですが、通い始めてみると、子ども理解の視点の基本が、学生時代に、愛育養護学校での実習で先生方と話し合った時のもの

や、幼稚園で働いていた頃に、同僚たちと話していた時のものとかかなり共通点があり、逆に視点が広がって、とても興味のあるものでした。

このコースは、週に二日夕方から、あるいは一日を使つて行なわれ、いくつかのセミナーによつて構成されています。イギリス人だけでなく、いろいろな国の人が参加しています。

基本的には、一年目のセミナーは四つで、フロイトの論文を読むセミナー、最近の子どもの発達に関する論文を読むセミナー、仕事現場からのレポートをもとに話し合うセミナー、そして赤ちゃん観察をもとに話し合うセミナーです。二年目は、メラニークライン等の論文を読むセミナー、パーソナリティーの発達を読み解くセミナー、幼児観察を話し合うセミナーと、仕事現場、赤ちゃん観察の五つになります。一応二年のコースだけれど、ほとんどの学生はフルタイムで働いているので、皆、自分のペースに合わせてセミナーを

選び、三年、四年と時間をかけて、勉強しています。

私は現在二年目のセミナーをとっているのですがその四つのセミナーの内容を次に述べたいと思います。

仕事現場からのレポートをもとに

話し合うセミナー

このセミナーは基本的に五人の学生、そして、子どもの心理療法家として働いている人がリーダーとして一緒に話し合いに参加しています。学生は、ソーシャルワーカーとして働いている人、自閉症児と働いている人、小学校で手が必要な子どもについて働いている人、あるいは担任等とさまざまです。私自身は、プレイグループでボランテニアとして二歳半から五歳までの子どもたちと半日一緒に時を過ごしています。他にも、中学校の先生や病院で子どもと働いている人もいますし、時には、ジャーナリスト等もいるようです。

自分の現場のある日の子どもとの関わり、子ども同

士の、あるいは他のスタッフとの関わり、また、遊びや表現、さまざまなことを見たまま、感じたままに記録をとり、セミナーでは、参加者がその記録から、感じたこと、思いついたことを自由に話していきます。

現場で自分がどう感じたかということは、その子どもの世界を理解していく上で、大切なものとして見えます。また、話し合いの中で出てきた意見も「子どもの理解」という視点から、同じように大切に扱われます。学生は活発に思いついたことを話します。いろんな見方が出てきます。どの見方も、なるほどそういう見方もあると、自分の中の枠が広がっていきます。

自分自身の興味深い体験としては、今日はこの子とじっくりと付き合ってみようかと思いつながらプレイグループにいくと、向こうからも近寄ってきて、遊びの中でいろいろな楽しさ、葛藤などを子どもが表現してくることで、顔の表情も私に理解して欲しいといっているようで、思わず、いつも以上にその子に真剣に

関っている自分を感じます。そういうこともすべて、セミナーの中で話していきます。

赤ちゃん観察をもとに話し合うセミナー

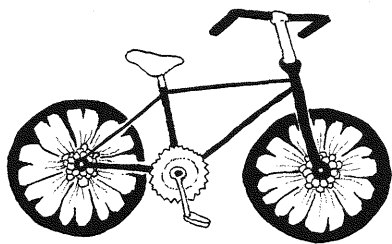
このセミナーも、基本的には五人の学生と一人のリーダーで構成されています。私たち学生は、観察する赤ちゃんを探すところから、このセミナーでのプロセスが始まります。出生後できるだけ早い時期から二年間、毎週決まった日に一時間、ご自宅にお邪魔して赤ちゃんを中心に、特に親とのかかわりや兄弟児とのかかわりを見ていきます。

小さな、身体の動きや顔の表情、また、他の人たちとのやり取りやものとのやり取りを丁寧に観察していきます、その中で感情の動き、心の動きに焦点をあてていきます。親と目が合った時の満面の笑みや、怖くてどうしようもないと大泣きする姿、そしてそれを優しくあやす親とほっとして落ち着いていく赤ちゃんの

姿、また、一つのおもちゃをじっとみつめながら握ったり離したりしている姿等から赤ちゃんの中にどんな世界が生まれ育っていつているのかをじっくりと二年をかけてみていきます。

このセミナーも、発表されたものから私たちが自由に感じたり思ったりしたことを話していきます、赤ちゃんやその家族への理解を深めていきます。

妊婦の方と交渉を進めている時は、妊婦も学生も共に不安だったりしますが、学生の不安はセミナーの中でじっくりと聞かれ、学生は次第に観察者の立場としての自分に自信を持てていきます。時には、親と子ども葛藤の場面などにも出会ったりしますが、批判することなくそこにいる、



と”として、赤ちゃんの親にとつても、その学生はその場にいるだけだけれど、大切な存在となつていきます。また、聞くだけだけれど、大事な話し相手にもなつたりします。

最近の子どもの発達に関する

論文を読むセミナー

前述の二つのセミナーよりも少し大きなグループ（十人前後）で、毎回必読の文章が三本ほどあり、それをもとに自由に話していきます。一年を通して、受胎時期から誕生、ことば以前の親とのやりとり、感情やことばの発達など、子どもの発達の流れに沿って、また、その発達に絡み合ってくるいろいろな要素に関するものを読んでいきます。

精神分析的な見方のもの（つまり、乳幼児の心の世界に焦点をおいたもの）を基本に、たとえば、低体重出生児に対するケア等の、特別の状態や虐待、障

関するものや、発達心理学や神経科学、認知心理学等の視点から乳幼児を見つめていったもの、また、一生涯という視点の中での乳幼児期を考えていったもの、保育施設での養育に焦点を当てたもの、文化や家族関係―父親、兄弟、双子等―の視点から乳幼児の心の発達を見つめていったもの等も盛り込まれていて、いろいろな視点から子ども心の世界を考えていくことができます。

時には、著者による講義があつたり、ビデオ鑑賞があつたりします。文章からだけでなく、講演者からかもし出されるその場の空気からも学んでいったりしています。

フロイトの論文を読むセミナー

精神分析的視点の発達を歴史的に学ぶということ、十人前後のグループで、精神分析を生み出したフロイトの文章を読んでいきます。彼が神経科医だった

ところから、患者を診ていくうちに無意識の世界の重要性に気づき、その治療法を試行錯誤しながら生み出し、精神分析学を構築していくプロセスは読んでみると結構面白いものでした。

特にこのセミナーでは、フロイトの考え方の発達を、臨床現場の具体的なケースの文章をもとに構成しているのが、患者から具体的に表現されたものを私たちも読みながら、フロイトがその表現にどのように向き合っていたのか、時代背景なども考慮に入れたりしてみたいと思います。

時には患者への対応に失敗もしながら、真摯に患者の心あるいは病気の理解を考えていつている姿に、私の仕事現場での子どもと向き合うプロセスそのものの大切さ、また、自由にいろいろな可能性を考えていくことの大切さを感じています。また彼は患者からの表現をそれは丁寧にみていて、乳幼児期の大切さを心の中で揺れる動く感情や心の世界への気づきから謳って

います。それは現在、私たちが保育現場で子どもと関っていく中でいつも大切にしているものと共通するものだと思います。

ロンドンには特に多国籍の都市で、難民も多く住んでいます。地域によっては、学校に来ている子どものほとんどが、英語が母国語ではない、それぞれ違った言葉を話しているというところもあるようです。そして言葉よりもその行動から、彼らに特別に手をかける必要があると感じている教育者が多くいます。子どもの心理療法師もかなりいるようですが、まだまだ足りないようです。だからこそ、タピストククリニクのような専門家養成機関は国としても非常に必要であり、これから更にその存在が重要とされることと思っています。

(ロンドン在住)